

英語進学科

日本大学付属高校生対象の「イースター・プログラム」

【イースター・プログラムについて】

日本大学では1987年、歴史と伝統を誇るケンブリッジ大学と学術交流協定を締結しました。それにより、ケンブリッジでは、サマー・スクールをはじめ、数多くの研修が日本大学主催によって行われています。イースター・プログラムはそのなかの1つで、春休み期間中に日本大学付属の高校生を対象に行われる研修です。1998年に日本大学とペンブルック・カレッジの共同出資により新学生寮が建てられ、生徒たちは、そこを拠点に共同生活をし、いろいろなことを体験します。ケンブリッジ大学では、実際の授業を受講してオーラル技術を身につけます。また、博物館など大学周辺の建物、施設などを訪問し、英国の歴史や文化、生活習慣を学びます。これらのことを通して、将来の留学、外国生活の予備体験をするとともに、幅広く国際的な感覚を身につけることをねらいとしています。(奨学金付)

宮崎日本大学高等学校は1年生を対象に3名をこのプログラムに派遣しています。今年は英進科の甲斐友理(東海中)、山本ひかる(生目中)、川島龍成(佐土原中)が代表として選ばれ参加しました。また、英語科教諭の南波妃佐子先生が代表引率者として、参加しました。

今年の参加者

H18	甲斐 友理 (東海中)	山本ひかる (生目中)	川島 龍成 (佐土原中)
-----	-------------	-------------	--------------



『現地の人とたくさん話すこと』

川島 龍成（佐土原中）

今回の研修でイギリスへ実際に行き、いろいろな所で様々なことを勉強してきました。

日本の高校では勉強しない「建築」について勉強したり、language の授業では、少人数に分かれて文法的なことを勉強したりしました。語彙力が少し伸びたとも思うし、文法的な部分も細かい所や間違いやすい所が理解できて良かったと思います。

研修の目標は、現地の人とたくさん話すことでした。「もう少し話せば良かった」と後悔している部分もありますが、いろんな事を現地の人を相手に話せて良かったです。また、いつか一緒に行った 69 人と引率の先生 5 人でいきたいです。

本当にイースタープログラムに参加できて良かったです。

これからの勉強に活かしていきたいと思います。

『たくさんのお話を学んだ 17 日間』

山本ひかる（生目中）

イースタープログラムに参加し、私は多くのことを学ぶことができました。ケンブリッジ大学の授業では、Art & Architecture といってイギリスの昔の建築から現代の建築について学ぶ授業や少人数に一人の先生がついて、ゲームをしながら英語の文法などを勉強する Language、現代のイギリスの社会を勉強する Contemporary Britain などの授業がありました。

TA とよばれる大学生が考えてくれる activity では、ケム川でパンティングとよばれるボートのようなものに乗ったり、TA や他の付属校の友達とバスケットやバドミントンをしたりしました。

また、一緒に 17 日間を一緒に過ごした全国 23 校の付属校のみんなは、とても私にとって良い影響を与えてくれました。普通ではほとんど触れ合う機会がないので、このプログラムを通して触れ合うことができてよかったと思います。みんな自分の意見をはっきりと持っている人が多く、ちゃんと自己主張ができている人ばかりで、私もこのままではいけないという気持ちがありました。

イギリスで過ごした 17 日間は私にとっていろいろなことを学ぶことができた 17 日間でした。一緒に過ごした 69 人は一生の友達です。

『経験を重ねて、これからの自分につなげたい』

甲斐 友理（東海中）

私のイギリスでの目標は、積極的に英語でコミュニケーションを図ることだった。

だが、それは私にとって、そう簡単なことではなかった。話したいと思っても、適当な単語がわからない。自分のあまりの語彙力の無さに、私はショックを受けた。好きなことや興味のあることも、表面の部分だけで、深いところまで話すことはできなかった。自分のことさえも伝えられないのかと悔しかったが、それから得られたこともある。自分のこれからの課題を知ることができた。小さなことばかりだが、今気付けて良かったと思う。

今回の研修で得たことを夏の海外研修で生かすこと、それが今の目標だ。そうやって少しずつでも、経験を重ねて、これからの自分につなげたい。

貴重な体験ができて本当に良かったと、心から思う。

『イースタープログラムの引率を終えて』

英語科教諭 南波妃佐子

冬が終わりを告げ、春が近づくのを感じさせるこの時期、ケンブリッジは大変美しいものであった。日に日に花を咲かせていく水仙の花。ケンブリッジの町先に咲き誇る桜の木。その清々しい環境の中で、生徒たちが毎日楽しそうに、そして充実した生活を送るのを見る喜びは、引率者一同同じ気持ちであったと確信している。

到着後の成田空港で、涙を流しながら「東京の大学に進学して、絶対再会しようね。」と約束を交わす生徒、帰国後、「もっと英語力を向上させたいので、今まで以上に頑張る。」と決意をした生徒、「今回の研修で見つけた自分の弱点を強化するために、夏の海外研修に参加する。」と、与えられる機会を最大限に利用すると語った生徒。

事前研修としての軽井沢での宿泊を入れると 20 日間。この短い期間で、私が想像した以上に生徒たちは互いに刺激し合い、交流を深めていたようである。

日本大学の付属校だからこそ、与えられた機会と、そこから得たもの。それを基により高い目標の達成を目指して欲しいと考えている